サルー
Salud!★16号
2014年7月9日

●キューバ友好円卓会議　通信
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03－3415－9292　　http://cubaentaku.web.fc2.com/
〒157-0073　東京都世田谷区砧8-15-14-101

2014年５月10日（土）於：文京シビックホール会議室１

実体験でキューバの現況を多面的に伝える

円卓会議のキューバ訪問団が報告会

キューバ友好円卓会議は2014年５月10日（土）午後、東京都文京区の文京シビックホール会議室で「直に見たカリブの島国　Cubaの歴史と現実 ― キューバを見る聞く知る８日間ツアー報告会」を開催しました。

「キューバを見る聞く知る８日間ツアー」は、円卓会議設立10周年を記念する行事の一つとして円卓会議が３月６日から13日にかけて実施したもので、会員を中心に21人が参加しました。今度の報告会はこのツアーの参加者による現地訪問報告で、会場にはツアー参加者、円卓会議会員ら約40人が集まりました。

報告会は、円卓会議事務局の二瓶裕子さんの司会で進められました。まず、参加者でツアー事務局長の杉本茂樹さんが撮影・編集したビデオ『キューバを見る聞く知る８日間ツアー』（36分）が上映されました。次いで、ツアーに参加した安田清（医師）、森田邦彦（翻訳家）、田畑光永（ジャーナリスト）、加藤玲子（キューバに自転車を送る会代表）の各氏がそれぞれツアーで感じたこと、印象に残ったことなどを話しました。

加藤さんは、名古屋在住のキューバに自転車を送る会会員から「キューバの発展に役立ててほしい」と託されていたキューバ宛の寄付金800万円を、ツアー滞在中にサンタ・クララ市のマリアナ・グラハレス産科病院に届け、病院関係者から大歓迎されたことを報告しました。

各氏の報告をめぐって質疑応答がありました。ここでは安田、森田、田畑さんの報告（要旨）を紹介します。

写真提供：川島幹之

キューバの医療から学ぶ

安田清（医師）

日本医療の欠点が透けて見える

キューバ医療の素晴らしさは、貧しい国なのに①誰もが無料で医療を受けられる②予防医学に力を入れ、お金をかけずに結果をだしている③途上国や被災国に手厚い医療支援をしている。ことなどであろう。

キューバ医療を知るにつけ日本医療の欠点が透けて見え、将来の参考になることがたくさんあると思う。特にこの①②について、２回のキューバ訪問で見たこと、３年前キューバ健康省の医師を病院の講演に呼んで聞いたこと、本で調べたことを参考に考えてみたい。

現在日本では高齢化が進み、医療費が上昇し、年金・医療費の給付減が検討されている。国民は年を取ること、病気になることを恐れ、医療崩壊が目に見えているのに誰も有効な解決策を示せない。ＧＤＰ世界第３位、ＷＨＯの「健康到達度」世界第１位の日本の医療に国民の不安は大きいのに、貧しい国キューバで医療は無料で国民は医療に不安を感じていない。どこか変である。二つの国の医療の考え方、制度について考えてみたい。

日本の医療は高度医療・先進医療を目指している。世界最先端の技術の獲得や機器開発に力を入れ、病院は最新式の医療機器を競い、マスコミは高度の診断・治療ができる病院を発表し、国民はより良い医療を求めて大病院をめざし、医師は専門医をめざし経験や技術を学びやすい都会の大病院に集中する。結果として地方の中核病院で医師が減り、医療過疎地となっていく。医療を受けられない地に人は住めない。子育て世代は地方から離れ、若者がいなくなった町は数十年後には消滅していく。

治療より予防を重視し、総合医を養成

一方キューバ医療の目指す方向は日本と異なる。革命前ほとんどの人が医療を受けられなかった悲惨な状況を立て直すため、多数の医師、それも総合的に診ることのできる医師を養成し（10万人当たりの医師数は681人<日本220人>）、家庭医とポリクリニコ（医師数十名を

擁する診療所）で病院前の医療を支える体制を作った。治療（お金がかかる）より予防を重視し、小児に 13 種類のワクチンを接種し多くの感染症を撲滅した。

日本では問題になっているのにキューバでは撲滅された感染症は、麻疹、風疹、百日咳、Ｂ型肝炎（28 歳以下）がある。国の隅々まで医療を保障している家庭医・ポリクリニコを維持するのに医師養成システムが役立っている。

キューバの医科大学は６年で最初の２年は座学、次の２年間は全国の医科大学での臨床講義、５年生は家庭医・ポリクリニコでの実習、６年生は患者を持つインターン。さらに医師免許取得後２年間内科と産科と小児科を研修し、総合診療科専門医の資格を全員がとる。

その後半数は家庭医になり、半数は外科などの専門医を目指す。家庭医と総合診療科研修医、ポリクリニコの医師と医学生が第一線の医療を支えている。ローテーションし最新の医学情報を学ぶ仕組みも担保されている。日本のように、僻地に行ったら一生そこから離れられないということはない。

日本の医科大学は６年で終了し、医師免許取得後２年間の研修医になり初めて患者さんを受け持つ。その後、全員が各科の専門医を目指す。日本では医療が専門化し、その狭間を埋めるために総合診療科が作られたが、キューバでは医療の根幹が家庭医だ。日本の医療者、行政はキューバの医療を見るべきだ。社会主義政策をそのまま日本に持ち込むことはできないが、目指す医療への大きなヒントがあると感じる。

予防重視のキューバ医療の第一線、ポリクリニコで話を聞く

キューバを訪ねて感じたこと

森田邦彦（翻訳家）

キューバは遅れているのか？

３月６日から 13 日までキューバを訪ねる機会を得た。キューバといえば、砂糖キビ、チェ・ゲバラとカストロ兄弟による革命、旧ソ連のキューバへの核ミサイル持込みと、これを阻止しようとする米国との間の核戦争一歩手前の状況となった 1962 年の事件など、断片的な知識しか持たぬ筆者にとっては、新たな知見とともに、人間を大切にしない日本とアメリカの狂気に満ちた社会を改めて考える契機にもなった。

現地では、ＩＣＡＰ（キューバ諸国民友好協会）の受け入れにより、航空機とバスで、ハバナ、東部の都市サンチャゴ・デ・クーバ、中部のサンタ・クララなどを、医療、教育、有機農業、遺跡観光のほか、歴史と革命に関する施設を見学した。実質６日間のＩＣＡＰ選定のモデル的な施設見学が中心で、農民や市民の生活の状況などを見ていない。筆者にはややハードな旅で、事前学習の不足もあり表面的な印象旅行であった。

かつて社会主義をめざした国々が、いまでは権力者への富の集中で貧富の格差が拡大する中で、ツアー参加者 21 名の多くは、キューバが平等主義を保持する社会主義国として、なお健在であることに関心があったのではないか。食料をはじめとして不十分な生活条件にもかかわらず、優れた医療制度と無料の教育制度がキューバ国民に安心感を与えていると、前キューバ大使の西林万寿夫氏は著作に書いた。

為政者を含めキューバ国民は、工業先進国の人々が享受する科学技術の発展に対して、どの程度の疑問を有するであろうか。近代科学，特に巨大技術はその便益に反比例して、大きな厄災をもたらす。また、化石燃料への依存や原子力の利用に批判や疑問を持っているのか。

こうした疑問を持たないとしたら、「便利」は「進歩」であるとする資本主義国の信念に近い意識から「キューバは遅れている」となり、キューバは、一後進国に止まり、他国が学ぶべきモデルにはなりえないと思う。

別な表現で言えば、一般に「景気」という言葉で代表されるＧＤＰ（国内総生産）という資本主義経済の計測指標に対して疑問を有しているのか、ということでもある。ＧＤＰは支出 ＝ 消費で計測される。資本主義国では病人や災害が増えれば、病院や薬品メーカーが繁盛し

タクシー代わりの乗合馬車。グァンタナモで

グァンタナモの有機農場

て景気が良くなるシステムであり、火災や災害は建築資材や災害復旧の公的支出となりＧＤＰを引き上げる。個人消費が低迷すれば人々に不安を煽り、軍需産業への支出を増やす。

ハバナ周辺で他国の都市と変わらぬ８～10 階建ての市民住宅を多く見た。ガイドに聞くとエレベーターなどはなく、ガスの供給もごく一部に限られるという。われわれの宿泊したホテルも８階建てで 50 年前のエレベーターがあり、使用の途中で休止し約１時間、閉じ込められた。水道の水圧も低く、シャワーが使えず不便した。土地は国有で十分あるのだから、エレベーターの必要のないホテルを作ればいい。われわれは、電気や水を大量に使い、いつの間にか「便利さ」＝「進歩」と思い込んいる。しかし、便利さは『進歩』ではなく『退化』と『依存』をもたらすものである。

キューバに提起したい３つの課題

キューバの人口は日本の１/10 の約 1200 万人、国土は日本の本州より少し小さく平坦地が多い。工業資本主義国の後を追うのではなく、「身の丈の技術」の独自の文化を作ることが十分に可能である。サンタ・クララでは多くの乗合馬車を見た。50 年前のアメリカ車がいまも走っている。シューマッハのいうスモール・イズ・ビューティフルな文化、循環を尊重する中間技術の文化の構築が可能な国と思われる。グローバリゼーションとは、畢竟、強者が弱者を世界規模で収奪し、飢餓を生み出すシステムである。キューバには、同じ道を進んでもらいたくない。

キューバの今後に必要なこととして３つの課題を提起したい。①食料の自立自給の実現 ②水の利用と循環思想をベースとした最小限のインフラ整備 ③広域経済から小域経済国への転換 ～ 馬車と自転車で生活ができる生活圏の創造である。 (2014.6.12)

キューバの経済改革について

田畑光永（ジャーナリスト）

守れるか？　経済改革の２つの目標

キューバから帰って、あの国はこれからどうなるのだろう、と考えている。

あの国の専門家でも、経済に詳しいわけでもないが、３年前に共産党大会があり「経済改革をやらねば駄目だ」という大方針が決まったと聞いた。３年経った今、どうなったのか、受け入れ団体ＩＣＡＰのアリシア・コルデラさんという副総裁に聞いたところ、非常に率直に「なかなか難しい」と話してくれた。

その後、４月 16 日の人民日報（中国）に「本紙記者がキューバを見てきた」という長文のルポルタージュが掲載されたのでそれを紹介したい。

キューバは社会主義を非常に長い間頑張ってやってきた。その一つの成果が、先ほど安田先生が紹介していた医療制度だと思う。原爆ばかり作って国民が酷い目を見ている北朝鮮と違って、同じ小さな社会主義国のキューバが医療に力を入れてきたのは、高く評価されるべきだ。

ハバナのＩＣＡＰ（キューバ諸国民友好協会）本部。左はアリシア副総裁

でも、あんなに自然条件に恵まれた国なのに食糧が自給できていない。それから言っては悪いが、ろくな工業製品も作れない。

先進国から来た観光客は「いいところだ。みんなで助け合えばいい国になる」というが、キューバの人たちの半分くらいは現状に不満を感じていると私は思う。だから、経済改革を

サンチャゴ・デ・クーバの市街地

やることになったのだろう。

昨年９月にラウル・カストロが外資導入の法案に署名した。我々が帰った直後の今年３月には、ハバナ近くのマリエールに中国でいう経済特区を作ることになった。460 平方キロという相当大規模なものだ。それが今急ピッチで工事の真っ最中。人民日報によると外国から 100 社ほど申込みがきて、70 くらいはまとまりそうだという。

人民日報の記者も、街を歩くと個人商店や個人企業が増えてきたと書いているし、今年初めからはタクシーも個人事業主になった。それまではタクシー運転手も公務員で月に 200 ペソの月給をもらって、車もガソリンも会社持ちだった。それが今は、売り上げは自分のものになるが、毎日 100 ペソ、月に 20 日働いた場合には 2000 ペソを納めなければならず、ガソリン、修理代も自分で払うという、いわば働きで収入がきまるようになった。

中国で改革開放が始まった当時「万元戸」という言葉が生まれた。自分で作ったものを市場へ持っていって自由に売っていいという制度ができ、貧乏の代名詞だった中国の農民が１万元の収入を持つようになった。人民日報によると、ハバナにも農産物市場が誕生した。お百姓さんはそこに持っていって好きなように売っていい。万元戸が生まれる土壌ができた。

先ほどのアリシア副総裁は経済改革について「社会主義の原則は守る」「農業の生産性は守る」の二つの目標を掲げた。しかし、そう言うことは簡単だが、非常に難しい。

万元戸の誘惑に勝てるか？

社会主義の建て前は「一人はみんなのために、みんなは一人のために」が原則だが、人間は「一人は一人のために」の状態で一番よく働く。「お前の田んぼだから、できたものは全部お前のものだ」となれば、本当に身を粉にして働く。こうした法則には逆らえない。

市場ができるとどういうことが起きるか。中国では万元戸が誕生した当時、「同じ丸いものでも、原子爆弾を作るより、玉子をゆでて売った方が儲かる」という冗談がはやった。キューバでいうと「外科の手術を勉強するより、ニワトリや豚の肉をさばいた方がゼニになる」ということになる。

そうなると社会主義は危ない。社会主義の原則と個人の欲望を刺激するインセンティブをどう両立させるか、果たしてそれは可能なのか。その結果が分かるのは、ここ２、３年が勝負だと思う。お金が第一の「改革」が主流となる可能性もある。

けれども現在、改革・開放の先進国、中国では無差別切りつけとか、テロの頻発に見られるように、激しい格差や若い人たちの前途に希望のない状況がある。日本やアメリカでも無差別殺人や無差別発砲など似た状況がある。個人が社会から見捨てられていると感じる状況が蔓延している。

そういう社会に比べればキューバにはホームドクター制度があって、すべての人が一生の生・老・病・死を誰かに見てもらえる。先進諸国に欠落している部分だが、それが万元戸の誘惑に勝てるかどうか。とても注目されるところだ。

私は 80 に近いが、もうちょっと頑張ってこの帰趨だけは見たいと思う。

■■■■■■ツアーのスナップ■■■■■■

キューバ革命の出発点と言われる１９５３年のモンカダ兵営襲撃に参加した１３５名が集結したサンチャゴ・デ・クーバのシボネイ農場。

2015 年にベトナムで「キューバ連帯アジア地域大会」

駐日キューバ大使館によると、2015 年にベトナムで「キューバ連帯アジア地域大会」が開かれるとのことです。日程はまだ決まっていませんが、大使館では「このアジア地域大会に多くの日本の友人の方々が参加していただきたい」と呼びかけています。

（大使館　03−5570−3182　担当：田代）

報告

2014年４月27日～５月11日　　主催：キューバ諸国民友好協会（ＩＣＡＰ）

第9回 メーデー国際ブリガーダに参加して

田仲泰子

筆者

キューバという国に偏見を持っていたわけではないが、日本から距離的に遠く、情報も十分にはないため、、今回のブリガーダ参加は「無事に帰ってこられるだけでもいい」というのがホンネだった。行く前はすべてが不安で、神経質になるほど心配した。８人の共同部屋生活、水だけのシャワー、トイレ 、早朝からの労働……。それが、着いたその日から不安もなく、嬉々としてキャンプ生活に溶け込めた。それは、ひとえに円卓会議の方々のアドバイスと励ましのお陰であり、大使館の田代明子さんから紹介していただいた友好協会の松竹照代さんが、絶え間なく届けてくださる連絡の数々のお陰であり、行きから帰りまでずっと一緒に行動してくださったお陰である。
こうして楽しく始まったブリガーダ生活で、強く印象に残った出来事をいくつか報告したい。

１．畑の労働

７時の朝のミーティング（朝礼？）でいくつかのグループに分けられ、今日の作業を告げられる。軍手、サングラス、スニーカー、帽子等の作業姿でトラック、トラクターの荷台に乗り、それぞれの畑･果樹園に出かける。私達韓国・日本チームはかなり遠くの畑へ。

途中、松竹さんが前回のブリガーダで石拾いをした畑が、今年は何かが植えられているのを見て、「去年石だらけの土地が農作地になってる！　石拾いもこうなるんならやりがいあるね」と言うのを聞きながら、朝の風を切ってトラックはサトウキビ畑を過ぎ、果樹園を通り抜け、広い畑に出た。日陰もないところなので、時々水を補給しながら約２時間石を拾った（写真下）。

２回目は、ビニールハウスの中の柑橘類の鉢の草取り、屋外でないのは有難かった。３回目は、イチゴ畑の草取り。隣のトマト畑で、鉄パイプをつないで水遣りをしていた。作業は今日で終わりなので、みんな軍手やアームカバーを外し寄付した。泥だらけのままで渡したのに、とても喜んでくれた。

日本で言えば「援農」活動。キューバの果物や作物が一面に育っているのを間近に見られたし、日本にいても土に触れる機会がない私には懐かしさを感じる作業で、行き帰りのトラックの荷台に詰め込まれて風を切って走るのも実に楽しい体験だった。

トラクターで畑へ出発！

２．病院・小学校訪問

カミロ・シエンフエゴ廟のカミロ（像）が見下ろすあたりに病院がある。その病院は地域診療所の上に位置し、地域診療所で扱いかねる状態の患者を受け入れる。さらにその病院でも無理な場合はハバナの病院へ送るという、キューバの医療体制の説明があった。乳児の出産の状況、精神科の患者に対する対応等の説明の後、看護婦の労働条件、アルコール依存症に対する質問が出て、丁寧な回答があった。

詳しい内容は聞き取れなかったが、『Salud！ 15号』に『キューバ医療の現場を見る』という本が紹介されていたので、ぜひ読んでみたいと思っている。

数日後、ハバナ市のお隣のアルテミサの小学校を訪問した。ダンスの先生がすばらしいモダンダンスを見せてくれた。小学校にプロフェッショナルなダンスの先生がいて、子どもたちに指導してることに驚いた。子どもたちも、衣装を着けて、男女組になって、いくつかのダンスを見せてくれた。「キューバは美しい国」と歌も歌ってくれた。

その後、教室をのぞいたら子供達が集まってきたので、一緒に写真に入ってもらった。そのうちの一人が紙に書いたものをくれた。

後でよく見ると、「大好きなお母さんへ、いつも愛してるよ」という言葉と絵が描いてあった。翌日が母の日だったので、学校でお母さんへの手紙を書いたようだ。お母さんには申し訳ない思いだった。

３．圧巻は５月２日の国際会議

国際会議で日本の現状を訴える発言をしたのだ。福島の原発事故とその後の政府の対応、沖縄の米軍基地、憲法第９条の危機的な状況について発言し、沖縄の基地建設に抗議するオバマ大統領へのハガキを掲げ、世界から

オバマ大統領へハガキを送る運動への協力を呼びかけた。友好協会の松竹さんが原稿を書き、希代さんがスペイン語に訳し、ハバナ在住の宮本眞樹子さんが練習し、スペイン語で発言した。

日本からの発言は初めてということで、間際まで発言要請が通るかと心配したが、内容がしっかり伝わり、会場は水を打ったように聞き入った。発言が終わると、各国の人たちがハガキと宮本さんとの連絡を求めて次々と寄ってきた（写真上）。キューバ放送局からもインタビューを申し込まれた。

今年は、日本の代表が参加していることを表す旗（友好協会の）も持っていったので、会場に大きく掲げられた。この旗は、キャンプの期間ずっと掲げられたし、メーデー会場でも大きく広げた。

４．映画『標的の村』の上映

韓国のチームがチェジュ島の基地反対闘争を描いた映画を上映すると聞いて、早速　松竹さんが交渉して同じ会場で、韓国映画に続いて、『標的の村』を上映することを了承してもらった。早速ポスターを作り、キャンプ内に貼り、宣伝した。私はキューバに来るまで、その映画のことを知らず、さらに高江にオスプレイ基地（オスプレイパッド）を作る計画も反対闘争も知らず、キューバで見ることになった。韓国の映画には英語字幕が付いていたが、日本の映画は日本語だけ。映像だけを見てくれる人がそれでも 20 人くらいいて、その人たちの思いに感謝だった。

そういった活動のお陰で、キャンプでもハガキを頼むことができた。日本はもっともっと世界の場で発言すべきだと痛感した。同時に、そのための武器である旗、発言原稿、その翻訳文、スペイン語（または英語）、ハガキ、パフォーマンス（今回は漢字文化を紹介したが）……の用意があったことがこのことを実現したと思う。

ブリガーダには今回で３度目の参加になる松竹さんは、今までの経験を踏まえ、世界に向けた発言、旗、そして沖縄の映画を準備した。その松竹さんと心を一つにしてスペイン語でスピーチし、オバマへハガキを送ろうと訴え、上映の際には弁士までつとめた宮本さん、このお二人と一緒に行動できた私は本当に幸せだった。

５．個人的な感動

（1）ブエナビスタソシアルクラブのライブ

オプショナルツァーのハバナカフェで、なんとあの夢に見たブエナビスタの現役メンバーのライブ演奏が聞けたのだ。チリチームが熱狂的に騒いでくれたお陰で、恥ずかしげもなく声援を送り、挙句、舞台に上がって踊る仲間に加わり、メンバーの間近に行けた！！！　そして大勢にまぎれて、その陰で握手しハグしてきちゃった！

（2）子供たちと日本語を学ぶ青年との交流

革命博物館見学で疲れてしまい、バスの出発まで２時間半ほど待たなくてはいけなかった。ちょうど木の陰の涼しげなところで、子供たちと先生らしき人が遊んでいた。楽しそうに遊ぶ様子を見ていたら、「どうぞ」と先生がベンチをさして座るように言ってくれた。

少したつと、「日本人ですか？」と日本語で聞かれたのでビックリしていると、すらりとした青年が話しかけてきた。ハバナ大学で２年間勉強したが、もっと勉強したくて一人で勉強している、日本人に会うと話す練習をしている、とのこと。

確かに話し相手がいないと会話の勉強はできない。彼の今の職業、日本にいる友人、家族のこと、将来日本語通訳になりたい……等話しているうちにあっという間に２時間たってしまった。日本からは手紙が着くまで１か月くらいかかるというが、ハバナの住所を聞いて、日本語で手紙を送ることを約束した。

（3）キューバの医療を体験

滞在の後半、ひどい下痢に悩まされた。４日間の間、食事は１回、スープ１杯ほど、あとは食堂でお湯をもらって飲んでいた。大阪の仲間が先に帰るとき、薬を置いていってくれたが一向に効かなかった。キャンプのアジア担当の女性に症状を話し、ドクターに診てもらうことにした。塩分を含んだ粉末を１袋くれて、「常温の水を１リットル飲むこと、お湯はダメ、食事は普通に食べること」と言って、血圧を測り、口の中やら目を調べてくれた。ドクターの対応に信頼が持てたこともあり、粉末を溶かした水を少しずつ１リットル飲み、よく睡眠をとり、食事もして……そうしたらなんと、１日もたたずに治ってしまった。

あんなに何日も悩んだのに。以前から医者と患者の信頼関係は大事だと思っていたが、こんなに早く治るなんて！　と我ながら驚いた。翌日あのドクターに会ったら「どう？」と声をかけてくれたので「もう元気です！　本当に有難う」とお礼を言えた。

帰国翌日から普通の生活（ボランティア活動、お稽古事等）にすぐ戻れ、もちろんおなかの具合も悪くなく、キューバがとても身近な、安心していける国ということを実感した。畑仕事もよかったし、掃除は丁寧だし、いつも陽気で、歌い踊り絵を描き楽しく暮らしている。「住宅が一番困っているかな」とハバナの青年が言っていたが、通訳になる夢はかなえる意気込みを持っている。

日本人がもっとキューバを知って、農家や職人、技術畑の人たちがその腕と資材をもって行って、キューバ産業に力を提供したら、きっとお互いにとってもいい関係ができるだろうな、と思う。

報告

2014年６月16日　主催：駐日キューバ共和国大使館　　於：東京・文京区民センター

アレイダ・ゲバラさんの話を再びきく

星野弥生（スペイン語通訳・翻訳家）

日本に初めてアレイダさんを招聘する、という大事業を果たしてから６年。こちらが何もしないでも眼の前にアレイダさんが現れてくれる、というのはなんだか不思議な気がします。６月16日、文京区民センターでアレイダさんの講演会ならぬ、日本のキューバの友人たちとの「懇談会」が開かれ、円卓メンバー５人が参加しました。
２日前の１４日は父親であるゲバラの誕生日。生きていれば86歳。アレイダさんは、いつもの朗々とした声で、数字をあげて、革命の起こった1959年と現在を比較し、キューバの人たちがどんなふうに生きているかを語ります。

数字が物語る革命の成果

「1959年、人口500万人のうち40%は読み書きができなかったのが、現在、人口1150万人の識字率は96%に。革命の時には全国に１つしかなかった医学部は、現在は各州にあり、ハバナには４校もある。1959年の医師の数は6286人、大部分が大都市に限られていて、革命後１年の間に50%がアメリカに渡ってしまいましたが、現在は国民137人当たり１人の医師がおり、99.9%が医療を受けられています。

革命は女性を尊重することを保証し、専門職の66%が女性。59年には乳児死亡率が1000人あたり60人だったのが、今日では4.2人。革命時60歳に届かなかった寿命が、77.97歳になっています。『140歳まで生きよう』というクラブだってあるのです。

予防接種は13の病気にわたり、すべて無料。以前は科学の研究所は皆無でしたが、現在はとても活発に研究がなされ、今後20年の間、アメリカの攻撃さえなければ最も先進的な場がキューバとなるでしょう」

そう、６年前もアレイダさんは同じように数字をたくさんあげて説明してくれました。

連帯している国々に多数の医師を派遣

「革命で提案されたことは、科学的な人間、考える人間、ということでしたが、そのことは片時も忘れられることなく、あのスペシャル・ピリオドの時にもその成果はあらわれたのです」

小児科医であるアレイダさんのキューバの医療に関する話はまだまだ続きます。

「ワクチンはどんどん開発されますが、一方でサトウキビ、アロエ、サソリなども用いる伝統医療、グリーン医療も重視されます。革命時には簡単な病気で多くの人が死にましたが、現在の死因は富める国と同じです」

「1963年にはアルジェリアに医師を派遣し、2008年までに13万4849人の医師が107の国に派遣されました。2010年には77カ国に37401人の医師が派遣されましたが、ベネズエラには別に34000人が送られています。ブラジルには14000人の派遣が考えられています。キューバの医師が働く国々では大きな変化がもたらされています。僻地が多いので、ただちに効果が現れ、乳幼児の死亡率が減少し、健康状態が改善されています。

2005年にカストロはヘンリー・リーブという、キューバ独立戦争の時にキューバのために戦った米国の医師の名をつけた緊急援助部隊を組織。その呼びかけに10000人の医師が応えました。キューバは、痛みや苦しみ、死に対して闘い、死んではいけない人を死なせない、治療できる病気は直すための備えをし、連帯している国々に、いつでも連帯の手をさしのべる努力をしています」

こどものいのちを脅かすアメリカの経済封鎖

そして話はアメリカの「犯罪的」な経済封鎖へ。

「封鎖によって、近くの国から買うことができないために遠くの国から買うことになる。その損失は2010年３月から2012年４月までに1000万ドル。とくに必需品の粉ミルクはニュージーランドなど地球の反対側から買わなくてはならない上、経済制裁法により、３～４倍も多くの船賃を払わなくてはなりません。

筆者（左）の友人の息子（16歳）が、私の本『父ゲバラとともに、勝利の日まで』を２度も読んで、キューバ、ラテンアメリカに興味をもち、参加してくれた。次世代の有力な円卓メンバー！？

キューバに寄港すると、６か月間はアメリカに寄港することができないことになっているのです。最悪なのは医薬品。アメリカの特許がある薬はキューバに売ろうとしないので、こどものいのちが失われる結果にもなります。封鎖はこどものいのちに影響します。だから私たちは封鎖に対して闘い続けています。国連総会では封鎖を非難する決議がだされるのに」

そして「希望」の話

「でもキューバは力強く、喜びを持って生き続けています。ラテンアメリカではベネズエラ、エクアドル、ボリビアなどの国々とＡＬＢＡ（米州ボリバル同盟…ボリバリアーナ※注の道）を創っているので、キューバは孤立してはいません。ゲバラが夢見たように、アメリカ大陸全体がより正義にかなったつながりとなれば、と思います。

キューバの始めた言語のプログラムに「Yo si puedo（私はできるよ）」というのがありますが、単にスペイン語だけでなく、ケチュア語、アイマラ語など多くの先住民の言語の識字運動でもあります。ホセ・マルティが言ったように『騙されないよう、操られないよう、人民は教養を身につけてはじめて自由な人間となれる』のです」

気になるベネズエラの情勢にも触れました。

「３月にベネズエラに行って、医師の話を聞きました。本当に厳しく困難な状況です。ナチやファシストよりも酷い人たちの集団があって、病院の前でゴミを燃やしたりしています。そういう人たちがアメリカに操られ、ベネズエラで混乱を引き起こしています。それがあたかも政府がやっているように報道されます。世界で起こっていることに警戒しなくてはなりません」

「世界的な不況の影響をキューバも受け、50 万人の失業者を生み出さざるを得ない状況です。そんな不況の中、個人の責任で働く（自営）、という政策が打ち出されました。それにはリスクがあります。自分のお金を稼げば、社会主義社会に住んでいるということを忘れてしまうかもしれない、ということです。そこで創られたのが「協同組合」で、個人がつながり、必要性に応じて自分たちが作っていくという路線です。しかし決して無理やりではなくて」

「私たちには、ＡＬＢＡがあり、ＣＥＬＡＣ(中南米カリブ諸国共同体。アメリカ、カナダを除外したアメリカ大陸の共同体）があります。これはリオ・ブラボーからパタゴニアにいたるまでの国々が社会的、経済的につながるためのものです。」

「ここで問いです。なぜアメリカが長年にわたって経済封鎖を行っているのか？　なぜ経済・軍事大国アメリカが小さな国キューバの変化に反応するのか？　なぜ、５人の反テロリストを不当に制裁しているのか？　答えは、キューバ革命がいまだに有効だからです。アメリカはキューバ革命を恐れています。フィデルが言うように『キューバは小さな国だけれど、やりたいと思ったらやれる、ということを世界に示すことができた』のです。他の国がキューバにならったら、どんな世界になるでしょう。搾取をしている国にとっては大変なことになります。

社会が正義であれば、将来の世代にとって世界はよりよいものになります。人びとは生を全うし、生き延びる権利を持っています。しかし、そういう社会は空からは降ってきません。人民がつながりあって、努力して初めて得られるものです。チェが言うように、勝利の日まで闘い続ける、ということなのです」

いつもながらの、力強い「アスタ・ラ・ビクトリア・シエンプレ」（勝利の日まで）で終わったアレイダさんのトークでした。

※注「ボリバリアーナ」とは、スペイン領だった南米大陸のアンデス５か国を独立に導いた英雄シモン・ボリバルの思想を受け継ぐという意味。

アレイダさんの 2008 年の日本での講演については、**『父ゲバラとともに、勝利の日までアレイダ・ゲバラの２週間』**を読んでいただけると、詳しくわかります。
星野弥生　編・訳
同時代社　刊（03-3261-3149）
E-mail：doujidai@doujidaisya.co.jp
1800 円（税抜）
★同時代社に、**「サルー！」16 号を見たと言って、2014 年７月末日までに注文された方に限り、**1600 円（税込・送料込）の特別価格で提供します。

ベネズエラのはなしをきこう！

こどもたちの共同体「ベンポスタ子ども共和国」を、ベネズエラで設立、運営しているマリア・ルイサが日本にやってきます。石油の都市、マラカイボ近くの原住民の子どもたちに、住むところ、学ぶ場や食べる場を提供するために大奮闘しているマリア・ルイサ。日本からも、「ベンポスタの友」のカンパが、建設の材料を買うためなどに渡されています。来日を機に、ベネズエラでの子どもたちのようす、ベンポスタの活動について話をきき、併せてベネズエラがどんな状況になっているのか、聞きたいと思います。

日時　７月 20 日　（日）　14 時～17 時
場所　世田谷ボランティアセンター（三軒茶屋駅下車　歩いて 10 分）
世田谷区下馬２－20－14
参加費　500 円
連絡先　星野弥生（ベンポスタ子ども共和国駐日大使）070-5554-8433
主催　ベンポスタ友の会　marzoh@gmail.com
共催　世田谷こどもいのちのネットワーク

日本・キューバ友好議員連盟主催/日本・キューバ友好 400 周年交流事業

全日空チャーター便でいく　キューバ・ハバナ6日間の旅

10 月１日～６日　申込締切り 7 月 31 日
参加費　ビジネスクラス　￥840,000
エコノミークラス　￥227,000
問合せ　近畿日本ツーリスト ECC 第五営業支店 03-6891-9305
（担当 渡辺・玉木）

★入会（年会費 3000 円）・カンパ随時受付中★
※住所・氏名・電話・メールアドレスを明記の上、下記にご入金ください。
郵便振替　00100－9－499950　　加入者名　キューバ友好円卓会議